

鹿屋総局・稻富大介

鹿屋市のつるみね保育園で、タブレット端末を活用した「デジタル保育」を取り材した。園児は端末を操作してかるた取りや計算クイズのほか、習った外国語をテレビ電話で話すことにも挑戦している。園児が慣れた手つきで操作する様を見て「こういう時代が来たのだな」と感心した。杉本正和園長は「デジタル機器を使うメリットは多い」と話す。例えば教材のコスト。読み聞かせで使ううちに傷む絵本も、端末に入れたソフトなら心配は無用だ。年齢別に難易度を調整したり、最新の教材入手も手軽にできる。何より動画や音声付きなので、園児が理解しやすい、具体的な教え方ができる。

杉本園長は「都市圏と比べて園児の数は少なくても、充実した保育を提供したい。デジタル機器の活用は過疎地だからこそ必要」と訴えた。この考え方は、過疎地にある小規模な小中学校でもそのまま通じるだろう。

小規模校は、個別指導しやすく、田植え体験など独自の学習を取り入れやすいという強みがある。半面、多様な意見に触れる機会が少ないなど教材のコスト。読み聞かせで使ううちに傷む絵本の面もある。もしデジタル技術を使えば、テレビ電話で他校と互いのまちの魅力を発表し合う、複式学級で学年ごとの教材を手早く切り替えて授業をする、などが可能にならないか。デジタル教育が、小規模校の教育の一助になればと思う。